

（セッション NO.2）「国際シンポジウム～言いたいことを言うべー会～」

○開催日時：平成27年9月20日（日）10：30～12：30

○場 所：広野町中央体育館

○ファシリテーター：米国陸軍工兵隊水資源研究所シニアアドバイザー
ジェロム・デリプリスコリ

○参加者数 約70名

○概 要

国際シンポジウムの参加者全員によるブレインストーミング方式のディスカッションを行い、以下2つの質問について意見をとりまとめた。

（※：複数の方が発言した意見）

【質問1：あなたにとって、津波・地震・原発事故による影響から感じた不満あるいは教訓は何ですか。】

1. A) 情報がない。* B) それを乗り越える信頼できる独立したメカニズムが欠けている。* C) 責任ある形で伝えなければならない。
2. 市民と行政の関係が難しい、行政が依存している。住民は相互に交流すべき
3. 地域が安全だと思い込み、前例から学んでいなかった。*
4. 個人個人がどうやったら安心感を持てるか。
5. 人間は変化を受け入れることが難しいが、一方で変化に慣れて問題が見えなくなる。
6. 被災者でないと災害を理解できない。
7. 前の制度では広域連携、市民参加が十分でなかった。
8. ここ被災地からも外部に情報を発信すべき。
9. 他の情報手段を使って、情報発信。
10. 事前の避難シミュレーション。
11. 役場は人々が災害の当初混乱することを理解すること、こういった理解がないと混乱状態が続く。
12. 行政とコミュニティの間の協議が不足。
13. 食品に対する懸念に対してもっとやるべきことがあるのではないか。
14. 良いプログラムがあったが実施の仕方が良くなかった。
15. 機会をうまく利用するメカニズムの欠如。
16. 震災によって自分の町や共同体の精神を考える機会になった。
17. 原発の近くに住む人々の意識や危機管理能力が低かった。
18. 広野の努力が外部に伝わらない。残念である。

19. コミュニティがバラバラになったことが問題。新しい住民が別の秩序を作ってしまった。
20. 皆が平等な扱いを受けていない、特に補償問題において。
21. 事故が起こりえないというべきでない。
22. 政府の取り組みに対して、人々には様々な認識がある。このような会議は外部へ何が生じたかを伝えることにおいて意義がある。
23. 人々のメディアリテラシーが必要。
24. 備えをしていくこと、避難のためのガソリンの確保など。
25. 人々の理解のできる様々な活動の時間フレームが必要。それにより今後何が起こるか理解できるようになる。
26. 市民に科学を教育して市民として責任をとれるようにする。
27. 何が起こったのかを理解できることが重要？
28. 誰が罰されるべきか？
29. 生活にはリスクがある。リスクに対する代償を理解しなければならない。

【質問2：これらの教訓に対して、あなた、あるいはあなたの組織は何ができますか。】

1. 市民との対話
2. 広域的な取り組み
3. 当事者意識を持つ
4. 災害のための訓練が必要
5. 情報が伝わったかを確認、情報を受けたことを認めること
6. 情報源を見つけることが必要
7. 人材育成※、災害に対するより良い想定
8. 海外への情報発信、研究機関、市民も放射線をよく理解することが必要
9. 科学や研究を通じたより良い情報共有
10. 研究者は比較研究による情報を与えること
11. 若者の教育
12. 被災者と自治体を結ぶ独立した機関
13. 市民が実施していること、市民の姿もマスコミが扱うべき
14. 市民は行政から独立した意識を持つこと
15. 町に住み続け、農業など続けること
16. 3.11 を記念日（追悼）に制定する
17. 域外から人々を連れてきて食べ物や自然の素晴らしさを伝える
18. 地元から国際レベルまで災害リスクを統合する
19. この状況に見合う教育により、学生に考えさせること